



インクルーシブ教育

校長 伊藤 栄司

先月は例年になく長雨の日が続きました。日本各地では大雨による被害も報じられ、自然の力の大きさを改めて感じる日々となりました。

10月は子どもたちが心待ちにしている運動会を予定しています。各学年では練習が少しずつ始まり、校庭からは元気な声が聞こえてくるようになりました。当日は、競技や演技だけでなく、友だちと協力しながら最後まで粘り強く取り組む姿をご覧ください。保護者・地域の皆様には、温かいご声援をお願いいたします。

インクルーシブ教育

さて、昨年9月に文部科学省教育課程企画特別部会が取りまとめた『論点整理』では、多様性の包摂(Equity)が次期学習指導要領改訂の重要な方向性として示されています。その中で注目されているのがインクルーシブ教育です。

インクルーシブ教育と聞くと障害のある子どものための教育ですかと聞かれることがあります。しかし、インクルーシブ教育には、LGBTQ+の子どもや経済的困難を抱えた家庭の子ども・不登校傾向の子ども等、あらゆる多様性をもつ子どもたちがともに学ぶことのできる教育環境を指し、「一人一人の違いを認め合いながら、みんなが共に学び、共に成長していく」との考え方がもとになっています。障害の有無だけではなく、得意なことや苦手なこと、性格や家庭環境など一人として同じ子どもはいません。一人一人の違いを大切にしながら学ぶ教育を意味します。

困っている一人のための工夫

例えば、授業中、発表することが苦手でなかなか手を挙げられない子どもがいます。「勇気を出して頑張ろう」と励ましたり、音読の練習に取り組ませたりして、その子の課題として解決を図る方法が一般的です。間違いではありませんし、力が付くのも確かです。一方で、やらされている感じがしたり、やってみようとする気持ちが芽生えなかったりすると、いつまでたっても課題の解決につながらないこともあります。

インクルーシブ教育の考え方では、まず、「みんなの前で話す」以外に解決方法がないかを考えます。「友達と話し合う」「タブレットに入力する」「紙に書いて伝える」など、いくつかの方法を用意し、手を挙げて大きな声を出すことを求めるよりも、自分の考えを表に出す方向に目標を変えます。すると、友だちに伝えたり、タブレットに入力して表現したりするうちに伝えるたのしさが分かり、少しずつ自分の考えを話すことができるようになります。

みんなのために

実は、一人の困った感を解決するための工夫によって助かるのは、その子だけではありません。人前で話すことが得意ではない子や、自分の考えを整理するのに時間がかかる子はどのクラスにも存在します。そこで様々な工夫で取り組むことで、皆が安心して学べるようになり学級全体の学びが深まります。「困っている一人のための工夫が、みんなのためになる」ことがインクルーシブ教育の大切な考え方です。

子どもたちの学校生活を見ていると得意なことや苦手なこと、一人一人の様子は様々です。走ることが得意な子、本を読むことが好きな子、人の気持ちに寄り添うことが上手な子、じっくり考えることが得意な子。それぞれが違うからこそ、学級や学校は豊かになります。

子どもたち一人一人のよさを大切にしながら、「みんな違ってみんないい」と自然に言い合える学校を保護者や地域の皆様と共に築いていきます。